

の時期は明らかにできなかった。

以上のように、保存すべき遺構は見出されず、発掘の範囲では、第一トレンチのIV層に疑問が残る以外、二次的な盛土と考えられ、遺物も、この盛土中から出土している。

土師器(第5図1・2)甕の底部破片1は、外面に叩き目が認められ、底部中央がわずかに凹んでいる。弥生後期末のものかも知れない。

2は、中・近世の土鍋。外面に煤が付着。

炆器(第5図3)摺鉢の破片3がある。

須恵器(第5図4・6)いずれも破片で全形をうかがえるものはないが、外面に叩き目を残し、6は広口壺かと思われる。

陶器(第5図7)ぐい飲み。近世初期の唐津焼き。

磁器(第5図8・11)8・10は碗、11は徳利の底部で、いずれもくすんだコバルトの染付、上釉は青味があり、近世初期の伊万里焼き。

埴輪(第5図12・21、第6図22・24)いずれも小型の埴輪円筒。外面は縦または斜め方向のハケ目。基底部の端部近くは、横ナデ(19・22)。内面は指によるナデツケの上をナデて(12・18・22)、さらに横(13・14)斜(15)または縦(16)方向のハケ目を加える場合がある。突帯は貼付け突帯で、横ナデをきつく施す低平なもの。透穴は円形(12)。焼成は、黒班のない赤焼きが多いが、14は須恵質、13は内部が須恵質。22が第二トレンチ第II層出土のほか、すべて第三トレンチIV、V層の出土。本陵の埴輪裾部の出土品と大きな差異は認められない。参考に、須

恵器と埴輪の一部を第7図に掲げておく。

(笠野 毅)

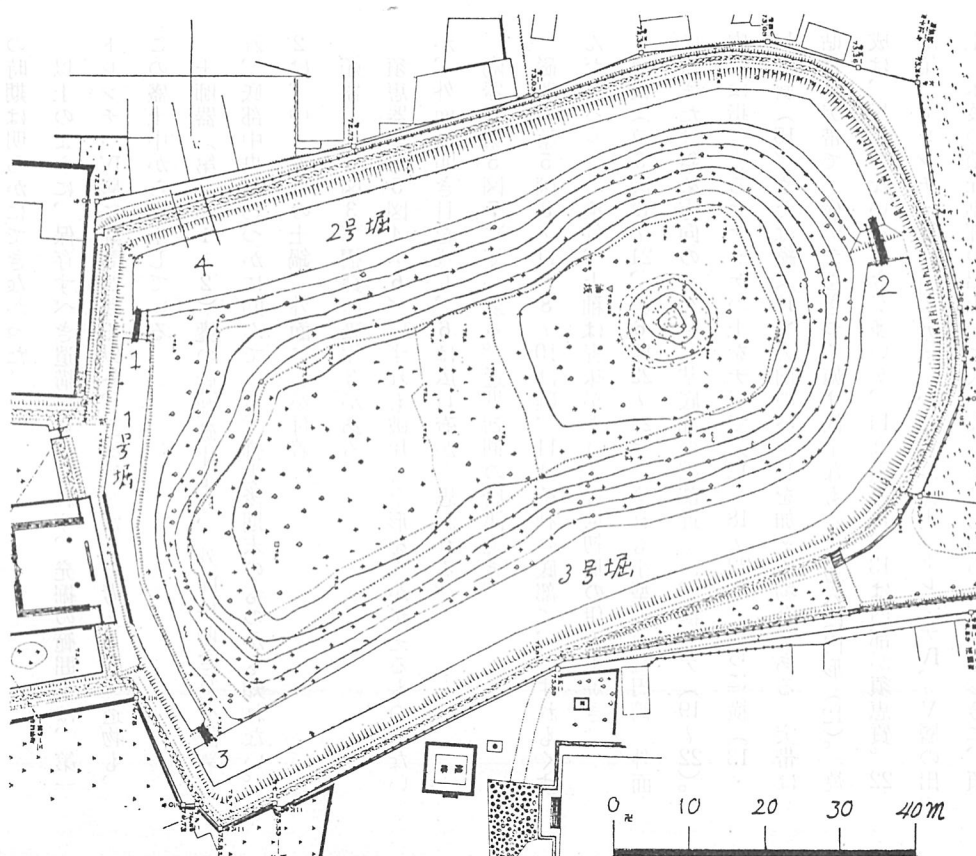
二 開化天皇陵の外堤止水壁設置箇所及び渡堤樋管改修箇所の調査

開化天皇陵の外堤の漏水止工事及び渡土堤の樋管改修工事を実施することになったので、昭和五十一年一月二十四日から二月一日まで、同陵の外堤及び渡土手で事前発掘調査を実施し、外堤では多数の出土品と、石組遺構及び、堀跡状の落込遺構を検出し、各渡土手からは、多数の出土物を採集した。

当陵は、春日山麓の東高西低の台地外縁に位置し、現在南は三条通りに面し、東は念仏寺(通称山の寺)と、北及び西は民家と、それぞれ境を接している。現在の陵形は、周堀のある前方後円墳であるが、文久の修陵の計画図によると、当時陵の墳丘としては、現後円部頂上の円丘部分、山丘状の念仏寺墓地中央に存しただけである。現在の陵はこの山丘状の墓地を墳丘とし、これをとりまく田畑や宅地の低地を整形し、宅地であった西側に築堤して現在の周堀をこの修陵の折に形成している。

調査はこの周堀の渡土手三本に、それぞれを一メートル幅でこれを横断する樋管埋設溝を兼ねたトレンチを設け、西側の外堤には、漏水の涌出口の内側に当る部分に四メートル幅で堤と直交する長さ約六メートルのトレンチを設けて発掘した(第8図1・4の箇所)。

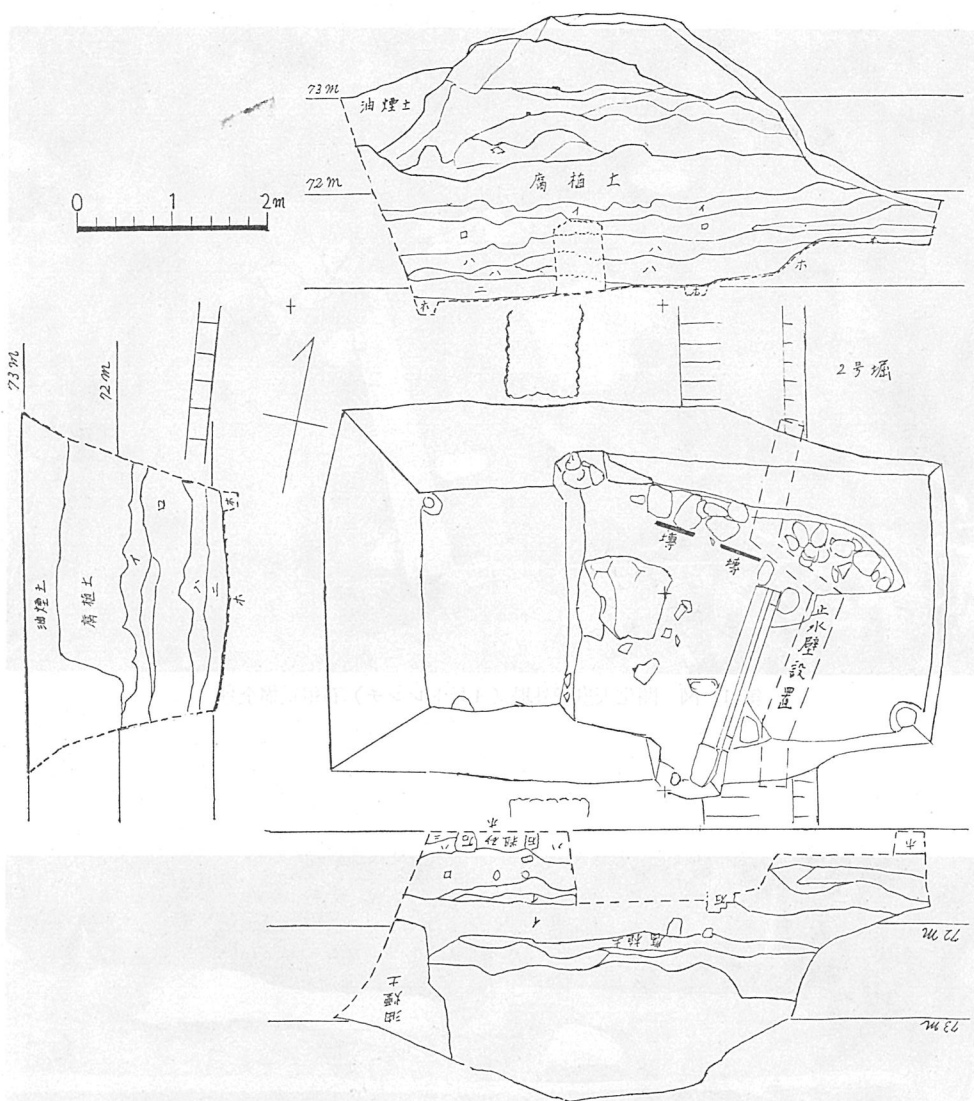
外堤の土相は、堤天端から約一・五メートルの厚さで盛土がある。塊



第 8 図 開化天皇陵トレンチ位置図 (縮尺 1/1000)

状又は層状の種々の土質の盛土で、瓦器・陶器等の遺物を多量に包含する。この盛土の外方斜面裾上には、厚さ三〇センチ程の油煙土の層が載っている(第9図)。恐らく製墨用松煙の滓を此処に投棄したものであらう。盛土の下方は五〇〜二〇センチの厚さで、腐植質の黒褐色土層がある。この層は文久の盛土か、或時期の生活面か判然としない。以下第9図の断面図のように、(イ)赤色の焼土状粒子を多量に包含する堅い灰褐色層、(ロ)粗い砂粒を含む黒褐色腐植性粘性土層、(ハ)灰墨色のへどろ様粘性土層、(ニ)灰色粘性土層、(ホ)礫交りの黄土色粘性土層の順に累積する。(ホ)の層は梅田教授の教示によれば、佐保累層と呼ばれる第三紀層である。この層は墳丘の堀側斜面に露出し、現在の堀底面をほぼ水平に形成し、現外堤敷の部分で、西側へ約四五度の勾配で傾斜し四〇センチ程落込で西に向って平坦面を形成している。この落込には、水中堆積物がたまって、(イ)(ニ)の地層を形成しているので、外堤敷の部分が旧堀跡の様な様相をしている。

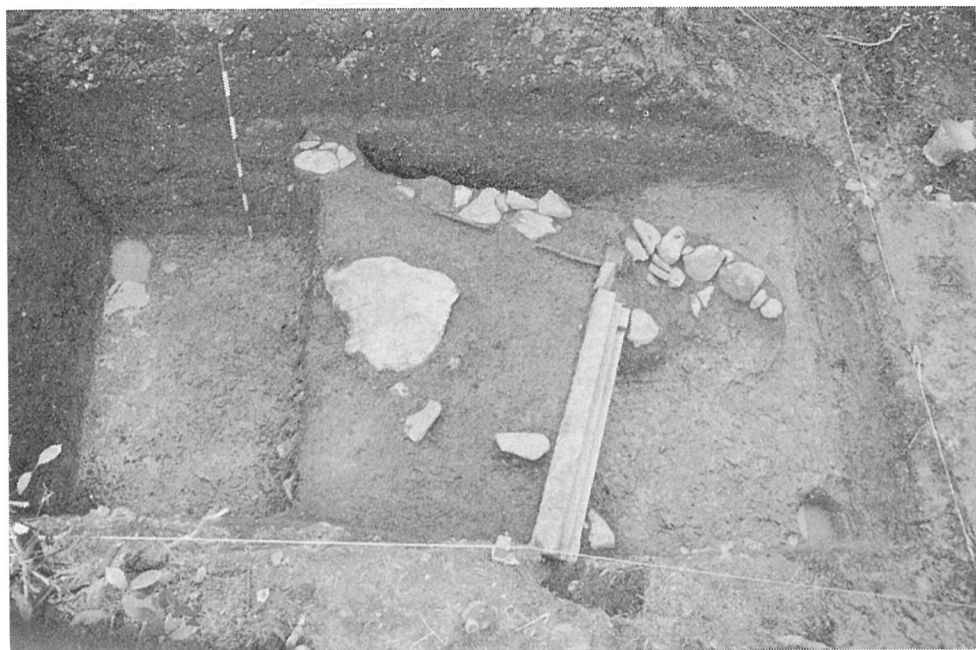
(イ)の層上部から第11図の様な遺構を検出した。南北に横たわる長さ一・八メートルの花崗岩の切石と、この切石の北端で直交する塼の列及びその北側に接する河原石の敷石と、中央の東西一メートル、南北〇・九メートルの「かなんぼ石」と此辺で称する石である。遺構の性格については、大井康守調査補助員



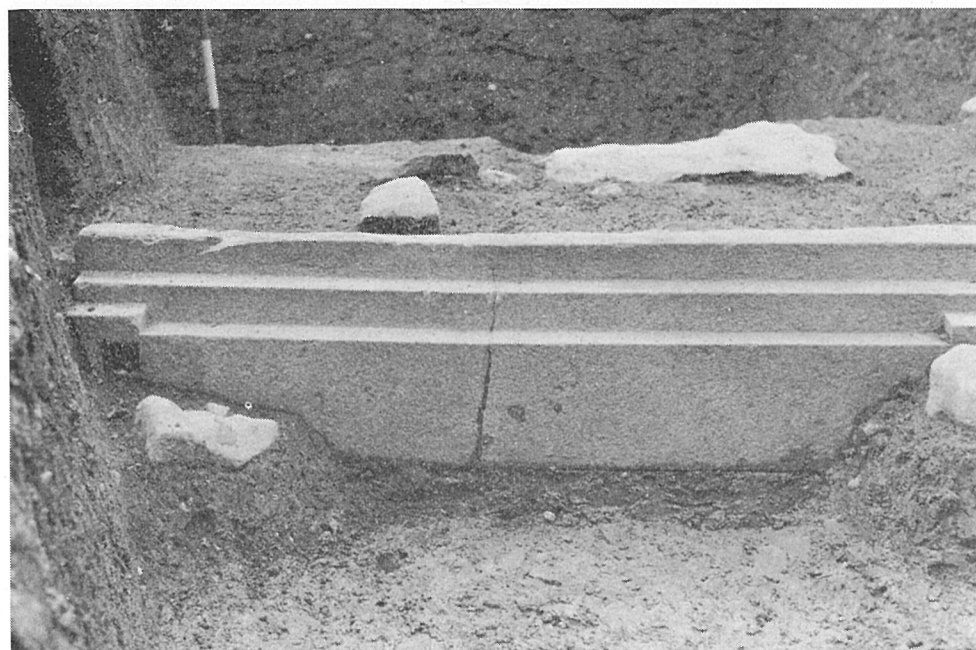
第9図 開化天皇陵外堤発掘実測図（縮尺1/80）（平面実測 松岡・池谷，断面実測 大井・山中）



第10図
開化天皇陵外堤（4号トレンチ）
土師器皿出土状況



第 11 図 開化天皇陵外堤（4号トレンチ）石組遺構全景

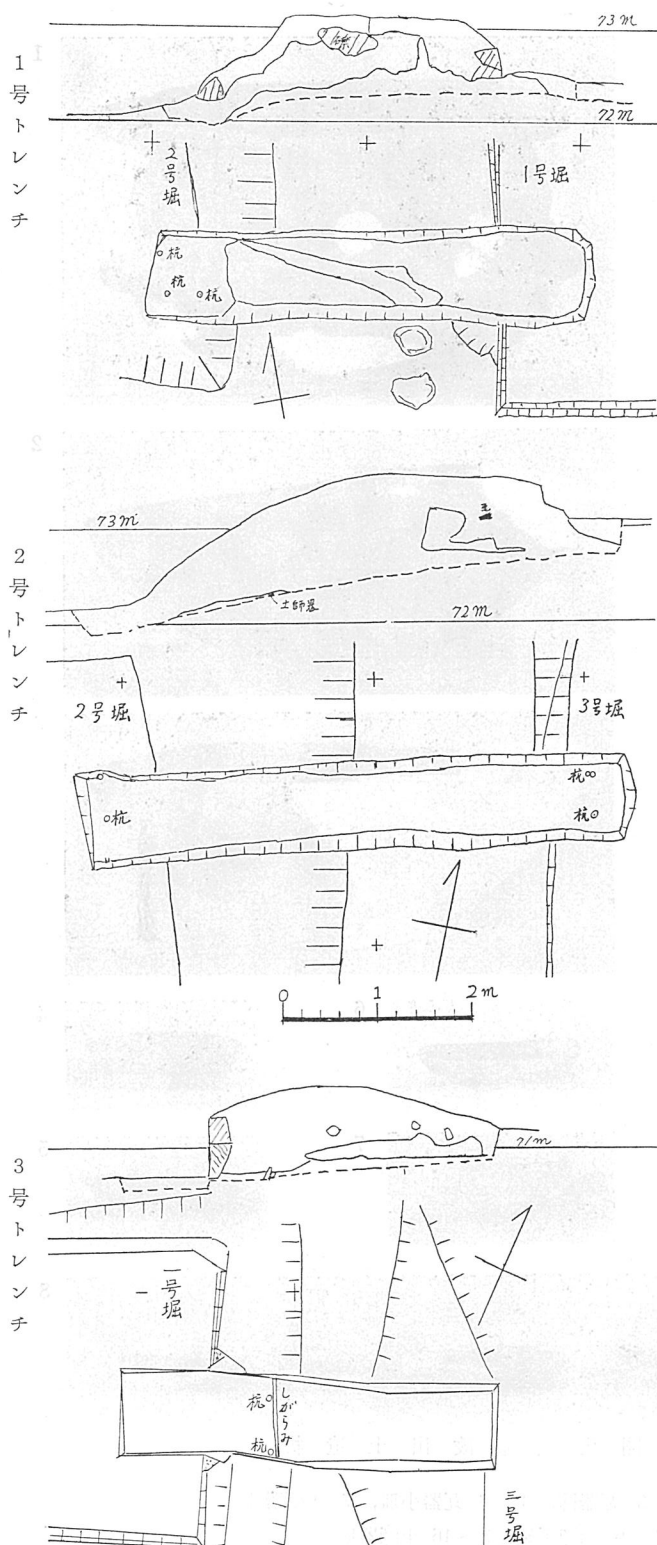


第 12 図 開化天皇陵外堤（4号トレンチ）石組遺構の花崗岩切石

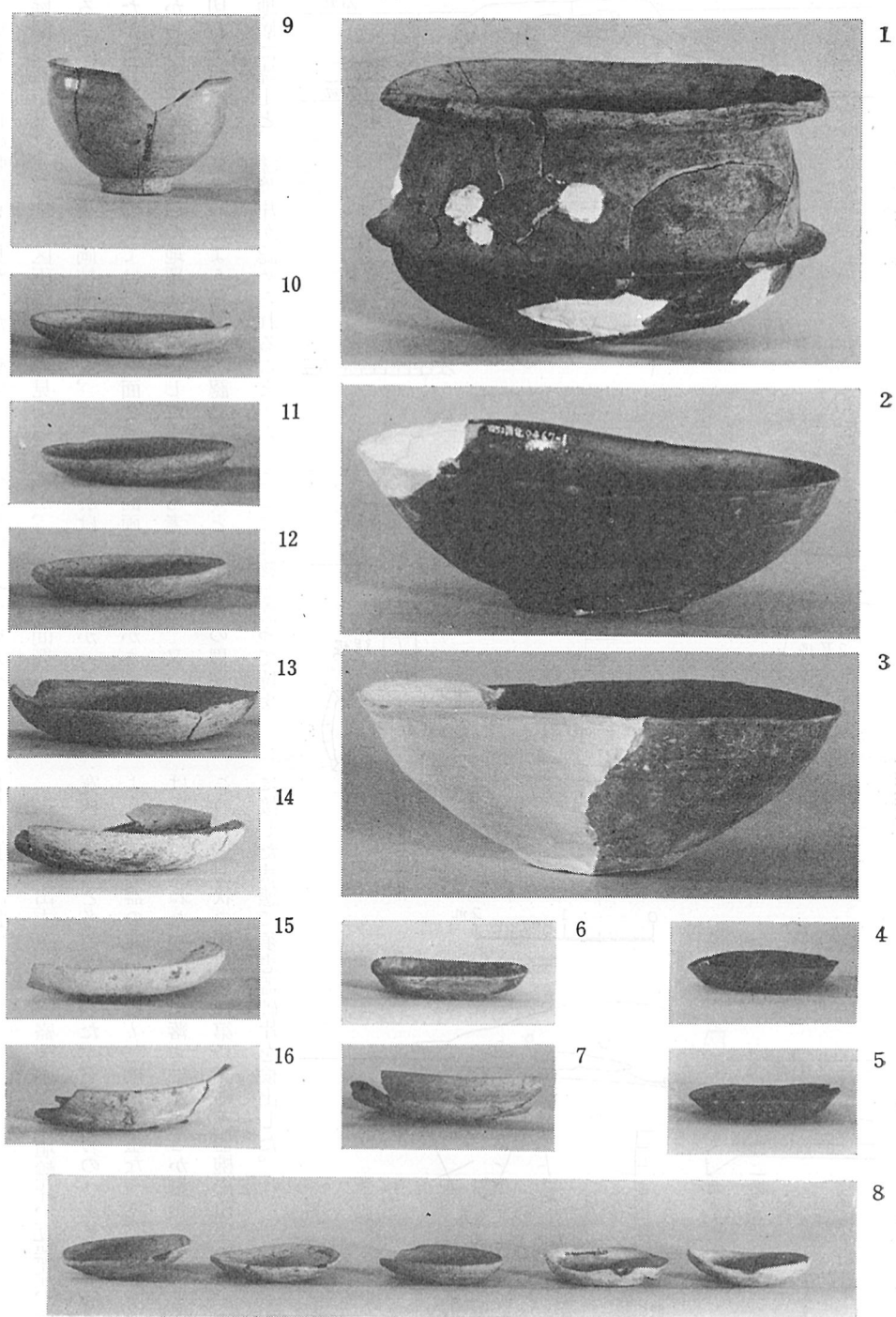
の切石を戸口の敷居石に見たてた、製墨場の土蔵の基礎とする見方や、庭園の石組又は、墓地の区画跡などの見方があるが、いずれも問題がある。末永博士、県教委の岡技師からも、明解な見解は得られなかった。ただ第12図の切石については、三段の面とりと側面両端に角穴がある点から、堂宇基壇の護石の地覆石を再利用したものと考えられる。又この切石上面に火災にあったような剝離が認められることと、切石の周囲の地層に焼土と、漆喰片が認められることから、ここに建物があつて焼失

した可能性は強い。

当地点の出土遺物は、盛土中より埴輪片、瓦器片、土師器片、陶磁片、寛永通宝など多数があつた。石組下方のへどろ様の層からは、第10図のように土師器の皿が五枚、三枚横に重なって、二箇所で出土した。これは重ねて束ねた物が堀に落ちこんだとか投棄されたものと考えられる。このへどろ状の層からは第17図の瓦器碗も出土した。又佐保累層の上面に接した状態で須恵器破片を検出した。



第13図 開化天皇陵渡堤発掘実測図 (縮尺 1/80)
(実測 松岡・池谷・中井・山中)



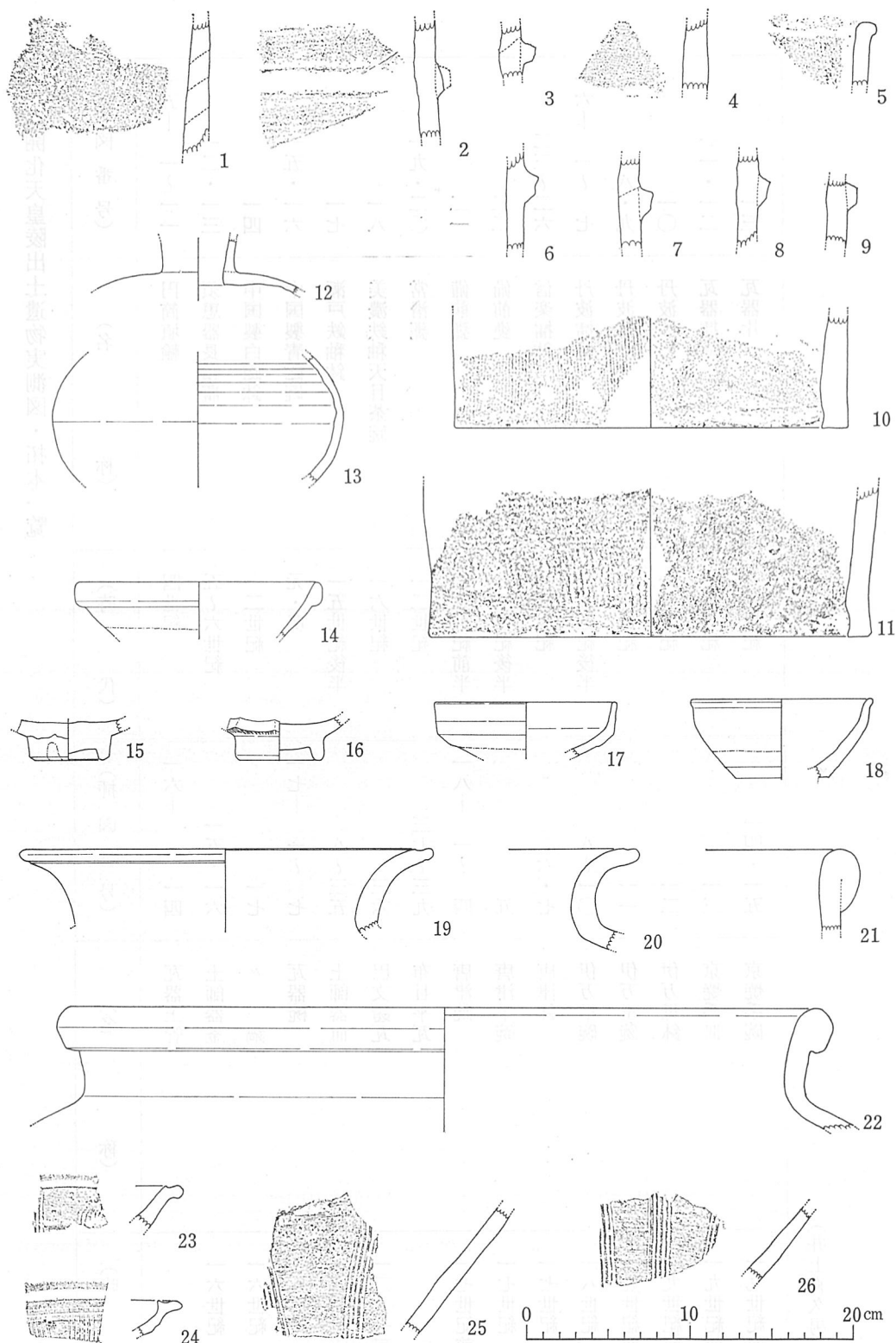
第14図 開化天皇陵出土遺物

- 1 土釜, 2・3 瓦器碗, 4~6 瓦器小皿, 7 土師器皿,
8 土師器小皿, 9 唐津系碗, 10~16 土師器皿

開化天皇陵出土遺物実測図・拓本一覽

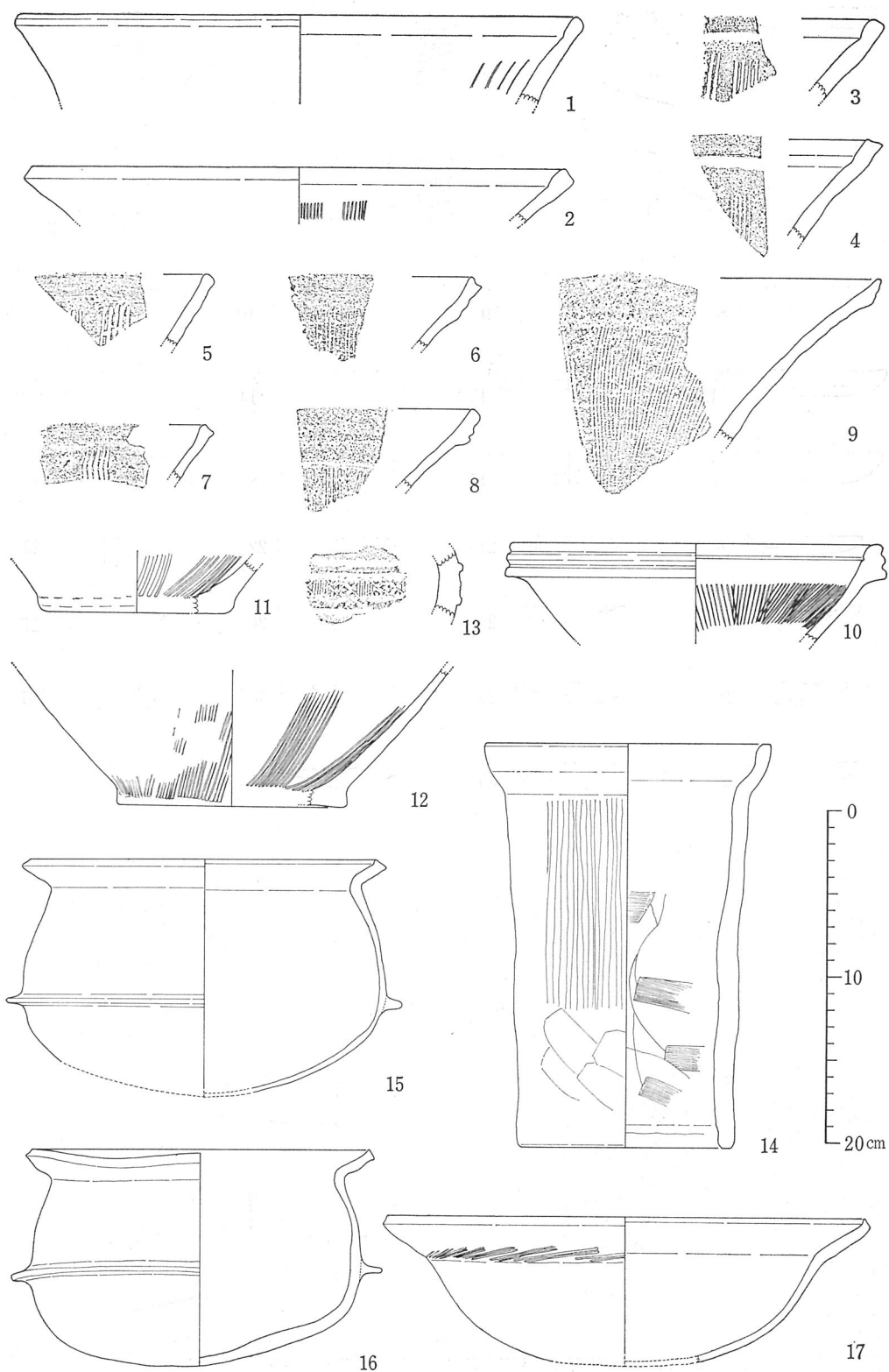
(挿図番号)	(名 称)	(時 代)	(挿図番号)	(名 称)	(時 代)
一五・一〇二一	円筒埴輪	四世紀	一六・一四	瓦器土管	一六世紀
一二・二三	須恵器長頸瓶	五～六世紀	一五・一六	土師器釜	一六世紀
一四	中国製白磁鉢	一二世紀	一七	鍋	一六世紀
一五・一六	中国製青磁碗	元・明	一七・一〇七	瓦器椀	一五世紀
一七	瀬戸鉄釉鉢	一五世紀後半	八・三五	土師器皿	一六世紀
一八	美濃鉄釉天目茶碗	一六世紀	三六	巴文鎧瓦	一二～一三世紀
一九・二〇	常滑甕	一二世紀	三七・三九	布目平瓦	
二一	備前甕	一五世紀前半	一八・一〇四	唐津碗	一七世紀前半
二二	備前甕	一四世紀後半	五	唐津系碗	一七世紀
二三・二六	信楽搗鉢	一五世紀	六・七	唐津鉢	一七世紀
一六・一〇七	丹波搗鉢	一五世紀後半	八・一〇	伊万里碗	一八世紀
八・九	丹波搗鉢	一六世紀	一一	伊万里碗	一九世紀前半
一〇	丹波搗鉢	一八世紀	一二	伊万里鉢	一九世紀前半
一一・一二	瓦器搗鉢	一六世紀	一三	京焼系皿	一九世紀前半
一三	瓦器片	一四世紀	一四・一五	京焼系碗	一九世紀前半

(井上喜久男 作成)



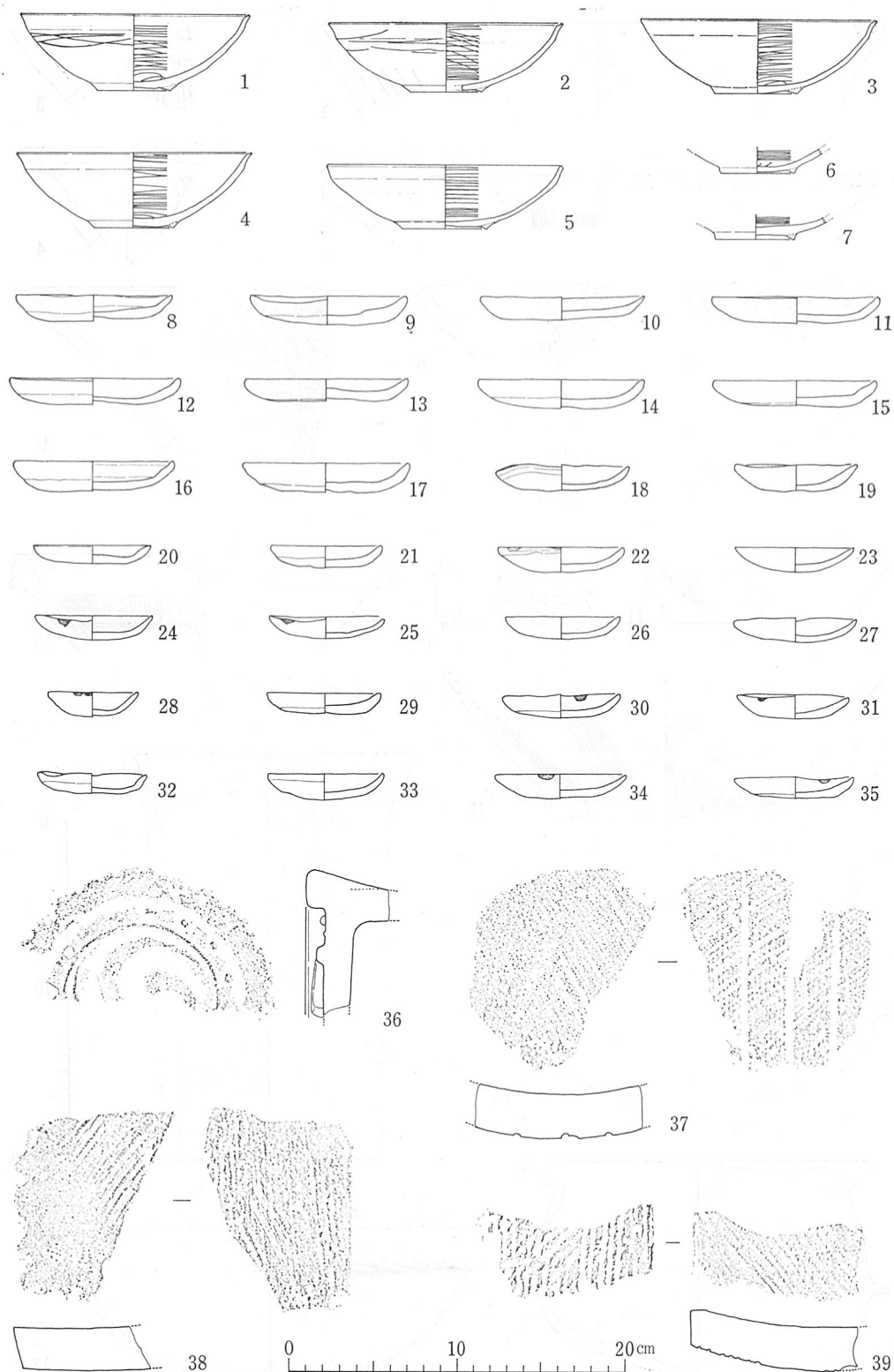
第15図 開化天皇陵出土遺物実測図（その1）（縮尺1/4 井上喜久男実測）

1～11 円筒埴輪, 12・13 須恵器, 14～16 中国陶磁, 17瀬戸鉢,
18 美濃碗, 19・20 常滑甕, 21・22 備前甕, 23～26 信楽揺鉢



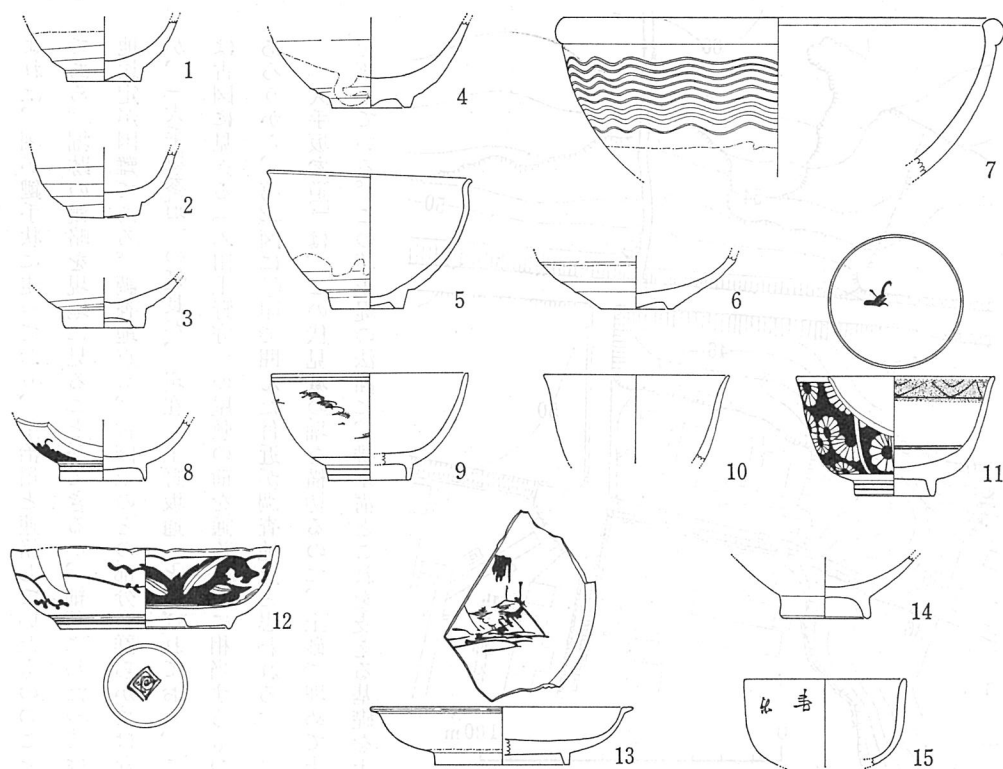
第16図 開化天皇陵出土遺物実測図（その2）（縮尺 1/4 井上喜久男実測）

1～10 丹波摺鉢，11・12 瓦器摺鉢，13 瓦器，14 瓦器土管，15・16 土釜，17 土鍋



第17図 開化天皇陵出土遺物実測図（その3）（縮尺1/4 井上喜久男実測）

1～7 瓦器碗, 8～35 土師器皿, 36～39 瓦



1～4・6・7 唐津, 5 唐津系
8～12 伊万里, 13～15 京焼系

第18図 開化天皇陵出土遺物実測図（その4）（縮尺 1/4 井上喜久男実測）

以上の事から当堤防敷は、堀跡の可能性が強く、この堀は江戸時代以前に埋められて、石組遺構が構築された事が察せられる。しかしこれが開化天皇陵の周堀であるか否かは、今回の所見だけでは不明である。従ってこれら遺構を保存する為、止水壁は第9図破線の位置に粘土壁を設けることとした。

渡土手の状況は、第13図のように、盛土により作られたもので、各堤とも築堤の土留の杭が検出され、3堤では土留の竹しがらみを検出した。出土物は陶磁・瓦・土器等の破片が多数あったが、近世の物を含み、文久修陵の際の築堤と見てよいようである。従って樋管改修は予定通り実施した。

本調査の出土遺物は、三千六百余片で埴輪片などの古代のものから中世、近世のものである。このうちどれが当陵と直接かかわりのあるものか、精査出来ていないので判然としていないが、一応形のわかるものの一部を第14～18図に示した。（石田茂輔）

三 桃山陵墓地内の崖地擁壁設置及び排水管敷設箇所の調査

桃山陵墓地内の桓武天皇陵と乃木神社を結ぶ「大手坂参道」と通称する通路の一部（第19図の×印）が、降雨のため崩壊したので、その復旧工事（昭和五十一年八月四日から）に立会った。

当該地付近は、京都市田中勘兵衛氏所蔵の伏見城古図の一本に